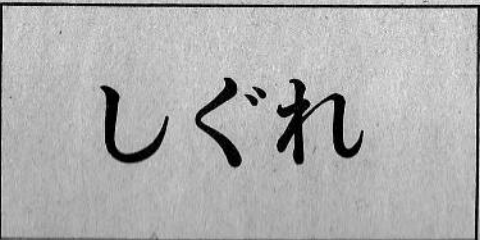


木島 桜谷

「のしま・持心」(一八七一年九月六日)京都生まれ、今尾昇年に學び、円山四峯派の画家であったが、それを平易に親しみ深い一回に発展させた。初期文房・出雲、何處も感賞して審査委員も務めたが、晩年は漢詩・漢文に親しみ、臨どした形で生誕を祝わった。代表作に「のしま」(一冊)、「野馬」(一冊)の書がある。



「しぐれ」は明治四十年第一回文展に二等賞該当なしの二等賞を受賞した作品である。桜谷満三十歳、ちよと結婚した年でもあり、仕事の面でも私生活の面でも彼の人生で一番希望に満ち充実した年であった。彼の人生の最初の部分は、早く父親を失ったため、四人兄弟の二男ではあったが、経済的な責任の一部を背負わねばならず、かなり厳しい日々であったようだ。馳けな記憶の中に、少年時代一枚何れか扇子の絵を目に何枚も描いたという思い出話がよくある。

二十歳代後半から名が出はじめた彼は、「のしぐれ」で受賞後もつきつき賞を得、大正中期までの十数年間、華やかな道を歩いた。しかし、その後は次第にいわゆる画壇から遠ざかり、気分が越々まことに絵筆を執り、詩書に親しんだ。何故彼がそのように画壇に背を向けるようになったのか。

「師今尾昇年から受けた教育と彼自身の思想とが時代に合わないものになっていた事にやるのではないだろうか」とある美術書には書かれてゐる。すでにさういふ時期に入っていた彼しが記憶にない私には、むしろかしい事情がわかるはずもないが、子供の目から見れば彼は静かな優しい好々爺でしかなかった。

彼は雷がとも嫌いだ。

門田 もも子

自然愛する心そのままに

た。雷が鳴り出すと、すく裡が水色のほかしくなった白い蚊帳をつり、子供たちを連れてその中に入ると、雷がすくと遠ざかるまでずっと息を止めていた。

画家に「おんその火鉢」

と雷が呼んでゐた火鉢があった。樽の丸太をくり抜いて作った直径四十センチのおんその形をした火鉢で、両脇にたんすの鑿のよみな道具がついていて持ち運びに便利にできていた。その灰のうらに何時もひんをのせていたが、中のお茶はすつきり煮つまって昔ながらの味だった。

お酒を原と入れてしまふなかつた彼は、そんなお茶を好んで飲み、虎屋のねり手糞が好物で何時も傍に置いていた。私には時々この苦茶を飲ませて貰ひ、行つては話話を聞いた。それは大抵狸の話だった。

家は千塚余りあり、広い庭があったが、植木屋を入れて庭園らしく造る事を好まず、樹々は思ひ存分枝を伸ばした自然のままの姿をしていた。彼が好んで描いた動物画の動物たちに寄せる温かい心や、ありのままの自然を愛する心、子供たちに対する限りない慈みの心、そのようなあまりにも純粋な心が、汚れた多い世間に背を向けさせる結果になったのかも知れない。

(かた・もも) 東大教授、門田元氏夫人、故桜谷孫